

読書レディネスに関する研究

(報告7) レディネス概念の歴史的展望

安 岡 龍 太

はじめに

レディネスという用語は1913年に E. L. Thorndike (1874~1949) によって「レディネスの法則」として用いられたことがあった。彼によると、所与の場面ではある伝導単位（特定の結合の成立に関与するニューロンとシノプセスを伝導単位という）が他の伝導単位にくらべて伝導する傾向性があるというのである。⁽¹⁾ そしてこの法則はつぎの3つの状況について述べている。1) 伝導単位に伝導のレディネスができているときには、それによる伝導は満足となり、その行為を変えるようなことは何もなされない。2) 伝導のレディネスができていない伝導単位にとって、伝導しないことは不満足となり、その特定の不満足部分と関連した何らかの反応が喚起される。3) ある伝導単位に伝導のレディネスができていないのに伝導を余儀なくされるときは、伝導することが不満足となる。この場合のレディネスは神経の伝導単位についての生理学的意味におけるそれであって、成長に関する法則ではない。⁽²⁾ 教育上の用語としてレディネス概念がはじめて用いられるようになったのは1925年の全米教育研究協会 (National Society for the Study of Education) の年誌においてであった。⁽³⁾

1926年に国際幼稚園協会 (International Kindergarten Union, 1892年創立) が「第1学年入学時における児童の読み方指導に対するレディネス」の研究を行ない、翌年このレディネスに関する最初の研究論文が *Childhood Education* 誌に発表された。さらに1928年に発表された W. S. Gray の論

文にはじめて読みのレディネスに関する3編の論文が掲載された。1936年に M. L. Harrison の著書⁽⁴⁾ が公刊されると、この読みのレディネスという用語が初等教育に携わっている人々にも用いられるようになったのである。実に1930年代から1940年代は読みのレディネスに対する関心が最も強くなった時期であった。⁽⁵⁾⁽⁶⁾

以下本稿ではレディネス概念の史的展望を筆者の研究のための1つの覚書の形で試みたい。

I レディネス概念の萌芽

レディネスという概念の起源は古く、歴史的にはすくなくとも200年前にさかのぼることができるという。第17世紀にすでに教育思想家の著作のなかには、その名称がなんであれ、レディネスという考え方が認められた。たとえば、M. E. de Montaigne (1533~1592) にはじまり、W. von Ratke (1571~1635), Johan A. Comenius (1592~1670) を経て、John Locke (1632~1704), Jean J. Rousseau (1712~1778), J. B. Basedow (1723~1790) およびその1派ならびに Johan H. Pestalozzi (1746~1827) にいたる所謂合自然 (naturgemäss) の教育思想の系譜のなかに認めることができる。J. A. Comenius はその著 *Linguarum Methodus Novissima* (言語の最近の方法) のなかで彼の教授原則につきのような原則をいれている。「学ぶまでに熟していない者には教えることはむずかしい」 (“*Doceri immaturum aegre docelis*”) と「教えられるまでに至っていない者には教えようとしてはならない」 (“*Imparatum doceri docere ne occipias*”) がそれである。⁽⁷⁾ レディネスの概念は Rousseau の著作 *Emile*⁽⁸⁾ のなかに明瞭な形で認められる。彼は学校の正規の教育を排して *Emile* を自然に従って教育したが、この「自然」というコトバにはほぼつぎの3つの意味が含まれているといわれている。すなわち、それは、1) 「人為」によって墮落されない「よきもの」という価値のシンボル、2) 「人為」によって左

右されない「必然」, 3) 内的発展的なものと解されている。⁽⁹⁾ この Rousseau の観点は Emile (1762) のなかに随所にみられる。

「あらゆるおくれは利益となると考えるがいい。なにも失うことなしに目標に進むのはひじょうに大きな得をしたことになる。子どものうちに子どもの時期を成熟させるがいい。それにまた、子どもになにか教訓が必要になったとしても、あしたまで延ばしても危険がないなら、きょう教訓をあたえるようなことはさしひかえるがいい」。

「読むことを必要とされるあらゆることを犠牲にして、読むことを覚えるくらいなら、むしろエミールがぜんぜん読み方を知らないでいた方がましだと私は思っている。ものを読むことを徹底的にきらいになってしまったら、読めたとしても何の役に立つだろう」。

「子どもの状態を尊重するがいい。そして、よいことであれ、悪いことであれ、早急に判断をくだしてはならない。例外的なものには、それがおのずからあらわれ、証明され、確認されるまでしばらく待ったあとで特別の方法を採用するがいい。長い間自然のなすままにしておくがいい。はやくから自然に代わってなにかしようなどと考えるてはならない。そんなことをすれば自然の仕事をじゃますることになる。わたしたちは時間というもの大切なことを知っているから、それをむだにしたくないのだ、とあなたがたは言う。時間のもちいかたをあやまることは、なにもしないであることよりもっと時間をむだにすることになるということ、そして、へたに教育された子どもは、ぜんぜん教育をうけなかった子どもよりずっと知恵から遠ざかることが、あなたがたにはわからないのだ」。こうした引用のなかにはっきりとレディネスという考え方の萌芽をみることができよう。

J. H. Pestalozzi は Rousseau の著作から深い影響をうけて Stanz(1798～99), Burgdorf (1799～1804), Yverdon (1805～1827) の彼の私立学校で Rousseau の考えを実践しようと試みた。彼は自然的にして調和的な進歩を確保するように自然の発達に手をかすことをもって教育者のなす務め

とした。この考えは「ゲルトルートはいかにその子らを教えるか」からのつぎの引用に端的に示されている。

「人間教育は、従ってその自然の、自己発展への欲求に手を貸す術に外ならず、この術は本質的には子どもたちの中に刻まるべき印象と子どもたちの発展し終わった力の一定度のものとの関係と調和のうえに存するのである。それで教育によって、子どもたちに与えられなければならない諸々の印象には一定の順序があって、その出発と進歩とは子どもたちの開発すべき力の出発と進歩に合致しなければならない」。⁽¹⁰⁾

Friedrich Wilhelm August Froebel (1782~1852) は Rousseau や Pestalozzi の考え方をさらに推し進めた。彼は Charles Robert Darwin (1809~1912) の進化論の影響をうけて人間を生物学的生活体とみ、人間教育に必要なものは栄養と自由だけであると主張し、人間の教育を「自覚的な、思索的な、知覚的な存在としての人間を、自覚と自己決断をもってする内面的な法則、神的なものの純粋な完全な表現にむかって刺激し、とりあつかうこと、およびそのための方策を提供すること」と定義した。この開発的教育論は、彼の「人間の教育」⁽¹¹⁾ からのつぎの引用のなかにさらにはっきりと浮き彫りされている。

「子どもが将来そうあるべき、またそうなるべきものはすべて、たとえきわめて微かな素質としてであれ、子どものなかにあるのであり、またそれがやがて子どもに現われてくるようになるときには、それは必ず子どものなかから発展させられることによるのみである」。⁽¹¹⁾

また Froebel は人間が乳児、幼児、少年、青年、成年および老年へと連続的に発達するという連続的発達観を主張した。⁽¹²⁾ この連続的発達観に関連して「人間の教育」のなかにレディネスという考え方が認められるようである。すなわち、「人間は、松葉杖や手引き紐を使って立ったり、歩いたりすることを、教えられてはならない。人間が、自然的にかつ自力で平衡を保てるような力を持つようになったときに、立たせるのがよい。自

発的に前に進みながら、自分の力で平衡を保つことができるようになったときに、歩かせるようにするがよい。坐ること、いや正しく坐ることができるようになり、つぎに自分のそばにあるなにか高いものにすがって立ちあがることができるようになり、こうして、最後に、なににも頼らずに平衡を保つことができるようになるまでは、立たせてはならない。這ったり自由に立ち上ったり、自分で平衡をとったり、平衡をとりながら前進したりすることができるようになるまでは、歩かせてはならない」。⁽¹¹⁾

しかし、John Dewey (1859～1952) ができるまではレディネスという考え方は少数の教育者や哲学者たちの著作に述べられていたにすぎなかった。Dewey はこの考え方を明確にし、再三再四力説した。彼は初等教育に関する論文(1898)のなかで、レディネスという用語は用いてはいないが、低学年における言語指導に対するレディネスを論じて、児童の感覚器官や神経組織がこの時期では、まだ読み・書きの学習には最適の状態にないので、このような学習を児童に強要すると、かえって神経組織が障害をうけることになると言っている。⁽¹²⁾

G. J. Patrick は Dewey の考えを祖述・普及するに努め、レディネスに関する論文のなかで、読み・書きが幼児の教科であるかどうかについて疑問を提起して、つぎのように述べている。「われわれが児童の心、彼の筋肉組織・神経組織、彼の特別の感覚についてますますわかってくると、読んだり、書いたりすることが学校生活の低学年ではなく、後の期間に属する教科であるという結論が確かにでてくるように思われるのである」。⁽¹⁴⁾⁽¹⁵⁾

II レディネス概念の成立

今世紀初頭の25年間にレディネス概念は、教育原理のなかに確固たる基礎を与えられたが、その背景にはつぎのような事情が関係していた。

まず第1に Dewey の影響をあげなければならない。彼は1902年に「児童とカリキュラム」(The Child and the Curriculum)、1909年に「思考の方

法」(How we think), 1916年に「民主主義と教育」(Democracy and Education)を公刊した。彼は「古い教育」に挑戦し、児童中心教育を主張したと普通には考えられてきた。

「児童が出発点であり、中心であり、かつ目的である。彼の発達・成長は理想的のものである。そのみが基準を供給する。児童の成長にとって、すべての学習は追随する。諸々の学習は、成長の要求に役立つためのものとして評価された道具なのである。本当に、われわれは児童と一緒にいるのだという立場をとらなければならない。そうでなければ、われわれは児童から離れてしまうことになる。学習の質と量の2つを決定するのは、児童であって教師ではない」。⁶⁶⁾

第2に E. L. Thorndike (1913) や L. M. Terman (1919) のような実験心理学者たちがレディネスに関連した研究をするための実験手続、測定用具、統計技法を考案していたことである。今世紀になって就学、進級、カリキュラム作成などの教育問題の研究の必要が痛感されるに伴って客観的測定がいよいよ活発になってきた。Thorndike はこうした客観的測定について特筆に価する心理学者であるが、彼は1904年に「精神的・社会的測定理論序説」(An Introduction to the Theory of Mental and Social Measurements)を著わして測定運動の端緒を開いた。これより標準テストやスケールが続々と作成され、1928年頃には標準テストの数はおよそ1300種に及んだといわれている。⁶⁷⁾

このような、ほとんどブームとなった科学的測定にさらに拍車をかけたのが学校調査運動であった。こうしてつぎつぎに行なわれた多数の学校調査報告に共通にみられることは大多数の児童が第1学年で落伍する理由が読みの学業成績がよくないためであることが最も多かったということである。この事実に対する関心はすくなくともつぎの理由からまたたくまに広く行き渡るにいたった。すなわち、1) 今日でもそうであるが、当時でも、読み方教育をうまく行なうことは小学校のなすべきことでもとくに重要な

ことと考えられていた。さらに 2) 第 1 学年で落伍者ができると、第 1 学年のクラスに年をとりすぎた児童が多数残ることになり、問題行動が続出したからである。⁽¹⁸⁾

さきに言及した全米教育研究協会の年誌(1925)が公刊されると、読みのレディネスに関する研究に拍車がかけて読みのレディネスの問題が明確に認識され、レディネス診断法が提唱された。1930年には E. C. Dewey によって、はじめて読みのレディネス・テストの体系的研究が行なわれてそのテストが発表された。彼はこのテスト得点が47点以下の児童の80%が第 1 学年の読みに失敗すると報告している。⁽¹⁹⁾

すでに指摘したように、1920年代、1930年代は人間行動の科学的測定のブーム期であって、たとえば、集団知能テストが多数作成された。この種のテストは読みの指導開始期についての研究に用いられ、はやくも1920年には第 1 学年で落伍する児童の精神年齢が 6 歳以下であると主張する研究者も現われた。その後になって、読みの指導開始期の基準として、ある精神年齢を確定することが提唱されるにいたった。たとえば、1925年に精神年齢によって第 1 学年の児童をグルーピングした研究によると、6～6½歳が標準的な第 1 学年のアチーブメントに必要な精神年齢だとされた。⁽²⁰⁾

読みのレディネスに関する研究のうちで最も影響の大なるものは M. V. Morphett & C. Washburne (1931) の研究であった。彼らはその研究からつぎの結論をだした。⁽²¹⁾

- 1) 精神年齢と読みの学習能力との相関はかなり高く、0.50～0.65であった。
- 2) 精神年齢と読みの進歩との相関は、精神年齢を Detroit First Grade Intelligence Test で測定した場合のほうが Binet-Simon Scale の Stanford 版で測定した場合よりも幾分か高かった。
- 3) 精神年齢だけが IQ よりも読みの進歩と高い相関を示した。
- 4) Detroit テストを精神年齢決定の基準として用いた場合は、精神年

齢 6 ½ 歳の児童はそれほど成熟していない児童よりもよく読みの進歩をし、精神年齢のもっと高い児童とほとんど同じくらい十分な読みの進歩をした。

5) 精神年齢を Binet-Simon Scale の Stanford 版で測定した場合は、精神年齢 6 ½ 歳の児童はそれほど成熟していない児童よりもよく読みで進歩したが精神年齢 6 ヶ月高い児童よりも十分な進歩はしなかった。

6) 1929～30年に別の教師、児童、テストでこの実験を繰り返したが、初期の基本的な結論は確証された。

7) 従って、児童が精神年齢 6 ½ 歳に達するまでは読み方の指導を延期することによって、失敗のチャンスを減らし、教師の能率を高めることができるといってもさしつかえないようである。

1920年代、1930年代に続々と「読みの問題」に関する研究が行なわれて、第1学年児童が読みの学習でつまづくのは指導開始時期にレディネスが児童にできていないためであるとされた。ここで今世紀の初頭にさかのぼるとき、心理学者として G. Stanley Hall (1846～1924) の存在を看過することができない。彼は当時における最新の科学理論であった Darwin の進化論を信奉し、人類の歴史と個人の発達の本質を解くカギとして児童研究がとくにたいせつであることを説いた。そして彼は人間発達における遺伝の重要性と反復説 (the doctrine of recapitulation) を強調している。

「われわれが今なおもっている発達についてのすべての事実の最も一般的な定式化は反復法則のなかに含まれている。この法則は個人がその発達のなかで民族の通過したのと類似の段階を同じ順次で通過するということをいっているのである」⁴⁾ この主張からは、段階を追って展開する予定的自然を強調する発達観がうまれてきた。この発達観は Hall の門下生、たとえば、Frederick Kuhlmann, Lewis M. Terman (1877～1956), Arnold L. Gesell (1880～1961) などに深い影響を与えた。レディネス概念に関連して、とくに Gesell の業績は重視しなければならない。

A. Gesell は C. Darwin, F. Galton, G. S. Hall の伝統を継承し、生活体の環境と経験との間の交互作用とか、この交互作用の発達に及ぼす効果に対してよりも行動の発達的变化についての生物学的考察に対して関心をもっていた。彼は 1) 成熟が発達の基本原理であること、2) 成熟が内的力による発達的变化であること、と考えた。環境的要因はこの発達の順序性に影響するとしても、基本的な道筋を規定するのは生物学的原因であるという。

「神経組織は、それ自身の内在的パターンに従って成長していくもので、行動の第1次形式はこの内在的パターンによってできあがるものである。この形式は、外界からの刺激によって決定されることはない。だから、経験は、この形式をどうすることもできない」。²³

この考え方は Gesell 研究所の F. L. Ilg や L. B. Ames のつぎのコトバに反映されている。

「年齢と個人差の双方に環境を適合させることの必要性は子どもの誕生の瞬間から明らかになる。いくら一生懸命に母親が乳児にきびしくスケジュールを課そうとしても、個人の要求に対応しないならば、うまくはいかない。……ひとりひとりの子どもが学校経験から最も多くのことを得ることを保証するためになされ得る最大の貢献は、子どもが彼にとって適時である時機に、その学校経験を始めることを確かめることである。この時こそ、まさにレディネスのととのっている時でなければならない」。²⁴ これと同じ立場は、Gesell 学派の人々よりも教育に深い関心をもっている J. L. Hymes, Jr. によって述べられている。

「赤ん坊がいつも自分自身のよい時期に坐ったり、這ったり、立ったり、歩行したと同じように、確実に読み方指導のよりどころになる力もまた発達するであろう。成熟と生活はこのことを不可避的にするのである」。²⁵

この成熟優位の発達観は系統発生的にきわめて低い段階にある動物についての研究によって裏づけられた、といわれている。たとえば、サンショ

ウオの行動発達についての G. E. Coghill の研究は、この種の研究のうちで最も有名である。J. McV. Hunt はこの種の研究資料の解釈について疑問をいただき、つぎのように言っている。

「これらの研究は、行動発達というものが解剖学的発達のように、頭部からはじまって尾部へと進んだり、内部から始まって外部へと進み、一般的単位から特定の単位へと漸次的に分化するものだということを実証してきた。このような証拠から Coghill らは、行動の解剖学的基礎が成熟するにつれて行動が自動的に展開するというもう 1 つの特別な考え方を推論した」。²⁹

この考え方は、1920年代、1930年代の児童研究でも強調されてきた。⁽²⁷⁾⁽²⁸⁾⁽²⁹⁾⁽³⁰⁾ Myrthe B. McGraw の研究はその代表的なものである。³⁰ 彼は乳児期における選ばれた運動技能の発達に及ぼす練習効果を研究し、被験児には男子の双生児を用いた。長い期間（2年間）この双生児の一方（ジョニー）には這うような運動技能を練習する機会を与え、他方（ジミー）には与えなかった。各双生児が種々の技能を習得する年齢がわかったところから、彼は発達過程が練習によっては促進されないと結論した。Gesell 流に言えば、神経系の成熟は練習のような環境的要因によってはなんらの影響も受けないようであるということになるわけである。

この成熟優位の視点を受け入れることになると、もし子どもが特定の運動課題、たとえば、這うことができないならば、それは這うことができる発達段階にまだ達していない。したがって、この子どもにはレディネスがととのっていないためだということになるわけである。その解決策は、Gesell 学派の人々によると、「時のたつのに任せよ」ということである。さらに、成熟が進むようになれば、この子どもはレディネスがととのって這うようになるだろうというのである。この考え方は子どもの運動技能だけに限定されているならば、その妥当性には問題はなかったのであろうが、それが子どもの知的側面の発達を説明するのに Gesell らの運動技能

の発達についての説明が用いられるようになってきた点に問題があったのである。このことはとくに読みの領域で最も顕著であったのである。⁸¹⁾

読みの学習能力が特定の発達段階と密接な関係があるところから、もしも入門期の読み方について児童に問題があれば、当然この児童にはまだ読み方を開始する発達段階に達していない。したがって、読みのレディネスが具わっていないものと解されたわけである。こうして読みのレディネスという概念が生まれてきたのである。もしも児童が1つの段階からつぎの段階へと進歩することが学習ではなく自発的成熟(spontaneous maturation)、内在的成長(intrinsic growth)、神経的成熟(neural ripening)などといった要因によるものであるとするならば(自然成長観)、時の経過に伴って自動的にレディネスがととのってきて、児童が読みに成功するだろうと考えられる。したがって、読みのレディネスのできていない児童の入門期の読みの問題に対する解決策として指導の延期が結論されるのも当然だといえる(延期説)。かくて第1学年の始めに読みのレディネスのできていない児童に読みのレディネスを促進するためのプログラムを実施するという考えが生まれてきたが、さらに、精神年齢の立場からレディネスをみる考え方が注目された。

ここでこの精神年齢的レディネス観の背景にある仮定に疑問をもった心理学者たちを見落すわけにはいかない。その代表的なものが Arthur Gates であった。はやくも1934年に Gates らは読みの成否を予測する因子としてレディネス・テスト得点の研究を始めていた。その後、この研究報告のなかで彼はつぎのような結論をしている。

「ほとんど、あるいはまったく予測的価値のないテストのなかには読みのレディネス・テストや教授についての著述・論文で広く推薦されているテストや評定法が多数あることは銘記されなければならない」。⁸²⁾

同じく1930年代に Gates は他に研究を行なって、読み方指導法と第1学年の成績との関係を明らかにしようとしたが、当時は精神年齢6½歳が

一般に入門期の読みの成功の必要条件とみとめられていただけに、この研究の結果はとくに注目に価する。たとえば、1つの研究は4つの読み方教授法と各々の方法による成績のことを報告したものであるが、研究結果を論評して Gates はつぎのように述べている。

「読み方は非常にちがった教材，方法および一般手続によって始められるが，生徒のなかには5歳の精神年齢でかなり容易に修得できるものもいるし，精神年齢7歳でも難渋するものもいる」。⁹⁹

Gates の諸々の研究からは児童に与えられる読み方指導の重要性を強調する読みのレディネス観が生じてきた。ところが当時では（1930年代）Gates の研究は比較的注目されなかったのである。この研究の結果は当時のレディネス観にも統合されなかったし，その方向を変えることもできなかった。というのも，すでに言ったように，1940年代，1950年代になっても，読みのレディネスに関する文献では依然として成熟，精神年齢，指導延期などが扱われてきたからである。指導法を変えることによって児童の読み方指導開始に対するレディネスが左右されることがあまりにもしばしば無視されてきたのである。

III レディネス促進的アプローチ

Morphett らの研究がでてから，読みのレディネスに関する実験的研究は盛んになり，1938年～40年はこの種の研究の最盛期であったが，1940年代，1950年代には読みのレディネスに関する研究は減ってきた。それは，すべての重要な側面が十二分に研究されてきたと考えられたからではなく，レディネスについて強調されるところがかわったからであるといわれている。読み方指導開始に対するレディネスに寄与する要因はその後の水準の読みの成功に寄与する要因とまったく同じものであることがわかったのである。したがって，レディネス概念は読みのすべての成長段階にも適用さ

れたわけである。¹⁴⁾

ところが1960年代に読みのレディネスに対する関心が復活してきたのである。さきにも言及した Gates の諸々の研究は今日ではその発表当時（1930年代）よりもよく引用されるようになった。このことは1950年代後半のアメリカの教育界・心理学界におこった革命的といつてもよい一連の変化のことを考えてみると首肯できるであろう。1957年10月4日ソ連によるスプートニック1号の打ち上げによって「第3の教育革命」がさらに促がされた。¹⁴⁾ この運動について Paul Woodring はつぎのように指摘している。

「この運動の起源は、第2次大戦が終って、父兄たちが、学校が子弟に対してなすべき最善を尽しているか否かに疑問を感じて憂慮し、失望し、公立学校の現状の批判者たちの意見が広く共感をもって受け入れられた時代にある。さらに、それに加えて、学術研究者たちは、標準が低下し高校のカリキュラムが時代おくれになっていると考えて憂慮していた。そこに刺激を与えたのは国際緊張の脅威とスプートニック1号の打ち上げおよびそれにつづく世論の沸騰であった。そして1960年までに、米国の教育に新生面がひらかれなければならないと信じてこの運動を支持する教育専門家の数は増加の一途をたどった。

まだ名前もなく、したがってそれははっきり把握するのは必ずしも容易でないけれども、この新しい改革運動はすでに確立され活発に成長しつつある。それはさまざまな側面を持っている。よりすぐれた厳密性とより高い水準とを強調して、『生活への適応』といったような個人的な目標をはなれ、国の生存と文化の拡大と進歩を可能にするようなより大きな目標を指向するというのもその1つである。また教育テレビやティーチング・マシンやマシーンに組みこまれたプログラム学習など、新しい技法上の進歩を利用する。学校における時間、空間、人員の要因を配分しなおし、チーム・ティーチングや学習を容易にするための生徒集団の再編成ができる

ようにする計画もふくまれる。今までよりも社会的ないしレクリエーション的な活動の比重を軽くし、知的発達を強調する。高校の教員に学術のしっかりした基礎を与えることを目的とするMAT計画のような教師教育のための新計画もふくまれる。……これらの諸側面は今のところまだ密接に相互関連するに至ってはおらず、これらが同じパターンの部分であるということを知らない教育者も少なくない。しかし後世の教育史家はおそらくこれらのいずれもが1960年代から70年代にかけての偉大な教育改革運動の構成要素であったと報告することであろう」。⁶⁵⁾

このようにソ連のスプートニック第1号打ち上げ成功はアメリカ合衆国の学校教育の質についての論争をさらに沸騰させ、「われわれの学校ではもっと沢山、もっとはやくから教ようではないか」という熱狂的な雰囲気醸成され、心理学に基づく新しい考え方に注目がむけられることになった。幼児の学習潜在能力や知的発達にとって幼児期がいかに重要であるかを強調する考え方がそれである。

ここでこの考え方について考察する前に、J. B. Watson (1878~1958)に言及するが、彼は極端な環境優位論を唱えたことで有名である。

「私に、健康で、いいからだをした1ダースの赤ん坊と、彼らを育てるための私自身の特殊な世界を与えたまえ。そうすれば、私はでたらめにそのうちの1人を取り、その子を訓練して、私が選んだある専門家——医師、法律家、芸術家、大実業家、そうだ、乞食、泥棒さえも——に、その子の祖先の才能、嗜好、傾向、能力、職業がどうだろうと、きつとしてみせよう」。⁶⁶⁾

この説に反発して、A. Gesell (1880~1961)は成熟優位説を唱え学習の効果を第2次的にしか認めない極端な児童中心主義に陥った。この成熟優位説の背景のもとでは、児童心理学や発達心理学の研究といえば、成熟に伴って自然に現われる発達の姿を年齢を追って記述するだけであった。ところが1950年代からアメリカにおける発達心理学の動向には大きな変化が

起こったのである。⁸⁷⁾ 上述の成熟優位の発達観は行動科学の各領域からの資料によって疑問視され、発達を規定する条件や原因を追求する実験的研究が続々と行なわれるようになった。そして1950年頃に成熟や成長よりも学習や経験が児童の発達にとって重要であるとする学習観が現われ、1960年頃から成熟優位説にとって代わるにいたった。⁸⁸⁾ この傾向はつぎの J. S. Bruner (1915～) のコトバに端的に示されている。

「私がのべてきたことは、精神的成長は、きわめて多くを、外からの成長——文化のなかに具体化され、文化作用に付随するコミュニケーションのなかに存在する諸技能の会得——に負っていることを示唆している。このことは、言語と文化のシンボルの体系が含まれる場合にいちじるしい。なぜなら、文化には、シンボリックな技能を形成するのに役だつ多くのモデルがあるからである。私は成長の多くは、われわれ自身の痕跡にしたがってたちもどることにより、また成人の教師の助けによって、われわれがしていることや見ていることを新しい形式で記録することによってはじまり、それからこれらの記録によって形成されてきた新しい所産で、新しい様式の組織へ進んでいくことに、私は疑問である。われわれは、「私が今なにをしているかがわかる」とか、「それで問題は、それがなにかである」という。新しいモデルがだんだん有力な表象的体系のなかに形成される。これこそ、教育過程の中心は、経験をより有力な記号や順序づけの体系へと翻訳するための助力と対話とを与えることからなりたっていると、私に考えさせるにいたったものである。そして、この理由からこそ、発達の理論は、知識の理論と教授の理論とに結びつけられねばならないのであり、そうでなければ底の浅いものとなる運命を負うことになる」と、私は考えるのである」。⁸⁹⁾

さきに言及した Myrtle McGraw (1943) の古典的研究をはじめ Gesell 学派の研究は教育における成熟優位説、したがって延期説を支持するものと考えられたばかりでなく、1920年から1950年間にわたって支配的であっ

た成熟優位説はとくに乳児幼期における行動的变化の環境的・経験的要因の研究を阻害・軽視する結果を招来した。そればかりではない。成熟優位説に関連して、乳児の反応潜在力が限られていることが強調されたり、乳児の学習能力が非常に限られていることを示唆する資料が強調されすぎたりしたのである。⁽⁴⁰⁾

ところが、この成熟観に致命的な打撃を与えた研究が乳幼児期の認知的学習についての W. Fowler の論文 (1962) に発表された。彼はいままでよりもずっと早い年齢で教育・指導を開始した数々の研究を論評した。たとえば、2歳前で読み方を教えられても、その後パーソナリティになんらの障害もみとめられない幼児についての諸報告を発表している。⁽⁴¹⁾⁽⁴²⁾⁽⁴³⁾⁽⁴⁴⁾ 彼は幼児期と児童初期における認知的学習に関する研究結果の要約のなかで早期に教育的介入をすることの重要性を強調している。

「就学前の年齢において、表面上は、最小限度の認知的刺激も、子どもの諸能力に適切に組織されるときは、知的機能の発達を早めるのに、きわめて有効でありうる」。⁽⁴⁵⁾

このような動向にさきがけて、1957年人工衛星の打ち上げ競争に負けてアメリカはいわゆるスプートニック・ショックをうけてからはアメリカの学校教育の質についての論争がさらに白熱化し、ソ連に比べてアメリカの教育への努力が劣っていることが強調された。⁽⁴⁶⁾ 翌1958年にはソ連へ教育視察団が派遣され、「国防教育法」が制定された。こうした状況のなかで翌1959年ウッズ・ホール会議が召集されて、初等・中等学校における科学教育の改善が討議された。この討論をまとめたものが J. S. Bruner の「教育の過程」⁽⁴⁷⁾ であることは周知のことである。

このなかで彼は科学を教えるに当ってその科学の「構造」の重要性を強調したが、この「構造」の学習の概念に基づけば、学習はレディネスに必ずしも束縛されないばかりか、レディネスを自由に作りだすこともできると考えられた。⁽⁴⁸⁾ これがレディネス促成的アプローチである。⁽⁴⁹⁾

さきにも指摘したように、従来、レディネスは固定的に考えられる傾向があった。たとえば、児童が入門期の読みに成功するためには精神年齢6½歳（精神年齢的レディネス観）に達していなければならないとされてきた。こうした精神年齢的レディネス観に対して、Bruner はつぎのような有名な学習のレディネスに関する仮説を提唱したことも人のよく知るところである。彼が思考を媒介する表象（representation）として 1) 動作的（inactive）、2) 映像的（iconic）、3) 象徴的（symbolic）の3つの体系をあげ、それが彼のこのレディネス観に影響しているようである。

「どの教科でも、知的性格をそのままにたもって、発達のどの段階の子どもにも効果的に教えることができるという仮説からはじめることにしよう。これは、教育課程というものを考えるうえで、大胆で、しかも本質的な仮説である。それと矛盾する証拠はなにもないどころか、それを支持するかなりの証拠が集まっている」。⁴⁰⁾

その後1961年に J. McV. Hunt の「知能と経験」⁴⁹⁾ が公刊されたが、これは過去の諸々の研究を論評・再解釈したものである。これらの研究のなかには学習に対するレディネスに及ぼす訓練・練習の効果を検討したものもあるが、それらの研究では運動技能とか知的技能とかの学習に対するレディネスは訓練や練習のような環境的要因の結果によるものではなく、成熟によるものと解釈されていたのに対して、Hunt は練習や経験がどんな技能の学習に対するレディネスにも影響すると解釈したのである。したがって、McGraw の双生児の場合には、2人の子どもが大体同時に這うようになったのは、ともに特定の成熟水準にあったばかりでなく、環境のなかで種々の刺激を経験する機会があったからである。Hunt は「人口の大多数の人々の知的能力の水準を高める方法を見出そうとすることはもっともなことであるという事実は、必要な研究をすることを1つの挑戦とする。それはわれわれの時代の主要な挑戦の1つである。さらに、行動科学が理論的にも社会的にも意義の深い貢献をなしうる見込みがかなり十分あ

るということは1つの挑戦である」⁶⁹と結論している。ここに彼の学習を重視する発達観が反映されているといえる。

さらに1964年には Benjamin S. Bloom 著「人間の諸特性における安定と変化」⁶⁹が公刊された。彼は乳児期から成人期にわたる人間形成に関する数100に及ぶ縦断的研究から得られた資料を詳細に検討した結果をつぎの3つの命題に関係づけている。

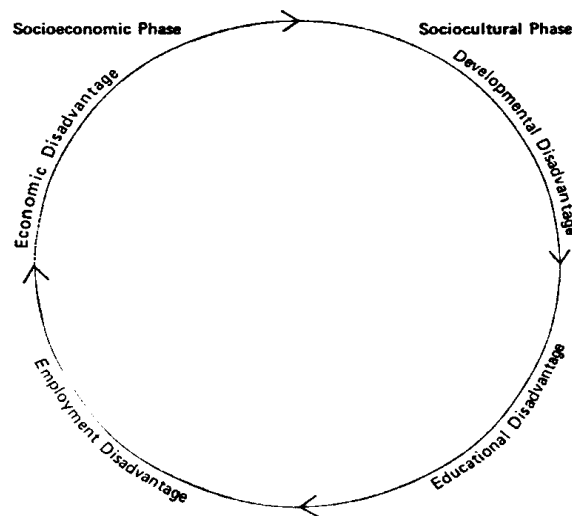
1) 長期間にわたって行なわれた対応する測定間の関係はいろいろの時期における発達水準の関数である。

2) 変動した測定値は最初の測定値には関係がないが、個体が変化期に生活した適切な環境条件には大いに関係がある。

3) 環境の変異の特性に及ぼす量的効果はその特性の変化が最も急激な時期には最も大きい、その特性の変化が最も急激でない時期にはその効果は最小である。

この命題を知能をはじめ多くの人間特性に適用して、この命題が育児や教育にとって理論的にも実践的にも重要であることを論じ、この多くの特性がその最も急速な時期（生後5年間）に環境から最も深い影響をうけると結論して、子どもの初期環境の重要性を強調した。⁶⁹人間の性格が幼児期のごく初期に形成されるという考え方は受け入れられるとしても、人間の知能が同時に形成される（人間の知能の半分が4歳になるまで形成され、就学するまでに成人の知能の $\frac{2}{3}$ に達する）という考えには賛成しがたいとする研究者もある。⁶⁹

このような状況のもとで社会の関心はいわゆる「貧困との戦い」(the War on Poverty)として知られている文化的阻隔児 (Culturally deprived children)の教育問題に向けられた。経済的にハンディキャップのある児童は発達が遅れて学習効果があがらず、したがって学校教育も十分受けられず、雇用上もハンディキャップを背負うことになり、経済的にもまたハンディキャップをうけるといった具合に悪循環の過程——「貧困サイクル」



(Poverty cycle)⁶²——をくりかえす。このサイクルを断ち切るための「貧乏追放戦争」(the antipoverty war)の一環として1965年にスタートした文化阻隔児に対する就学前運動がプロジェクト・ヘッド・スタート (Project Head Start) である。⁶³ この運動が盛んになってきた背景には「生後5ヵ年間における知的学習と言語発達がその後のパーソナリティーと知能に対して大きな影響を及ぼす」という学問的認識がある。⁶⁴

それよりさきの1962年に「社会的不遇児の就学前充実教育」のために会議がもたれ、標準的なナーサリ・スクール場面から期待される以上に幼児の認知的発達を促進することができるかどうかを検討された。翌年にももう1つの会議が開かれて、「よく構造化されたプログラムによる早期介入が社会的に辺境な環境の減衰効果を低下させるであろうという仮説」を検証した研究の数々が会議の日程にのぼった。さらに1966年には全米教育協会の教育政策委員会は「文化的に恵まれない児童」ばかりでなく、すべての児童に対する早期教育を支持する声明を発表したが、この声明のなかのつぎのコトバからは今日の心理学や教育の新時代の特徴がうかがわれる。

「ますます多くなっている一群の研究や経験は6歳までにすでに大抵の児童が成人になってからもっているであろう知的能力の大部分を発達させることを明らかにしている。6歳とは今日では一般に正規の就学年齢と認

められているが、われわれはこの慣行が時代遅れであると信ずるものである。すべての児童は4歳から公費で就学の機会をもたなければならない」。⁶⁹

こうした1960年代の状況のもとで人々は 1) 読みのレディネスを従来のように解してもよいものか、 2) 新しいレディネス観に立つならば、これまでに入学後に行なわれてきた読み方教育はどうなるであろうか、と疑問をもち始めてきたのである。このきっかけをつくつてきたのが 1) アメリカにおけるモンテッソーリ教育のリバイバル、 2) O. K. Moore の研究、 3) 就学前に家庭ですでに読めるようになった幼児に関する縦断的研究などであった。

(1) モンテッソーリ教育の復活

アメリカ連邦政府が幼児教育にますますかかわりをもってくるに伴ってモンテッソーリ法に対する関心が復活したのである。ヨーロッパでは今世紀に入る頃に受け入れられると間もなく、広く歓迎されたが、アメリカではモンテッソーリ教育に対する関心は短命に終わってしまった。その理由は、**Hunt** によると、モンテッソーリの考え方が、当時アメリカでようやく目だってきたいくつかの傾向とまっこうから衝突したからであるという。たとえば、人間の知能を固定的なものと考えていた知能テスト運動、認知的発達よりも性心理学的発達を強調した精神分析運動などがそれである。ところが、**Nancy McCormick Rambusch** が1958年にモンテッソーリ・システムによって **Whitby School** を開設して、モンテッソーリ教材と教育課程によって、いかに3歳児、4歳児が読み・書き・スペリングを学習できるかを実証した⁶⁹ のに端を発してモンテッソーリ教育への関心が復活したのである。もちろん、その背景にはつぎのような事情があったことも看過できない。**Hunt** によると、今から50年前には 1) 3歳児、4歳児にとって学校経験がその後の発達には重要ではない、 2) 知能が固定的なものである、 3) 発達があらかじめ決定されている、 4) すべての行動は本能や苦痛刺激などによって動機づけられている、 5) 運動反応こそ学習

にきわめて重要である、と考えられていたが、この考え方は大きく変わってきたという。

「科学技術の発達は言語学的・数学的に問題を解決する能力を新たに奨励している。この技能に欠けている人々はそれだけ文化に参加する機会を発見することが少ない。さらに、これらの技能をもっていない両親に生まれた子どもたちは公立学校で成功するのに必要な基本的能力で遅滞させるような貧困とスラムとに関連した文化的阻隔を被る。引用した証拠から就学前経験の充実化がこのような文化的阻隔に対する有望な解消薬たることが明らかになるであろう。ローマのサンロレンゾ地区におけるモンテッソーリの子どもたちはそれを始めて始める適切なモデルを提供する。かくて児童発達に関するこうした信念の変化や文化——そこでは科学技術がますます重要な役割を果たしている——における文化的阻隔克服の問題は児童教育学へのモンテッソーリのアプローチを再検討するに十分な理由である」。⁶⁷⁾

(2) O. K. Moore の研究

1958年から1968年くらいの10年間に認知心理学者たちの研究によって幼児に潜在的学習能力があることが認識されてきたが、⁶⁸⁾ その研究の1つがO. K. Mooreの研究である。⁶⁹⁾ 彼は応答する環境 (Edison Responsive Environment) を用いて、2, 3, 4歳児に読み方を学習させて注目を引いたが、ここで問題になるのは、この「応答する環境」の背後にある教育思想である。いままでは成熟優位説が幅をきかせていて、幼児が読めるようになるには精神年齢6歳以上でなければならないと考えられていたが、「応答する環境」は従来の成熟優位のレディネス観に挑戦し、その修正をせまるものであったといえる。

(3) 幼児の早期読書に関する研究

この種の研究が他にも行なわれたが、就学前に家庭で読めるようになった幼児についての Dolores Durkin の縦断的研究は有名である。彼の最初の研究は1958年9月に開始され、もう1つの研究は1961年9月に始められ、

両研究は1964年6月に完結された。当時は 1) 小学校入学後数週間に読みのレディネス・プログラムを実施することが必要である, 2) 入門期の読みの必要条件として精神年齢が6½歳であること, 3) 幼児の早期の読みについては家庭では手をかすことをよしとしないこと, が認められていた時代であった。Durkin はこの2つの研究によって 1) 就学前の読書能力を規定する要因, 2) 早期の読みの学習の価値を検討するために, 5,103名の第1学年児童からすでに就学前に家庭で読めるようになっている児童49名を被験児として選んで, 第1の研究を開始した。

この49名からなる実験群の読書成績得点の平均は第1学年の初期では, 学年基準によると, 2.3であり, 終期では4.0であった。第3学年の終わりまでには, この実験群の読書成績は4.4～6.0で, 中央値は5.0であったのに対して, 統制群(201名)のそれは2.0～6.0で, 中央値は4.3であった。この両群を比較すると, 知能が低いほど, 読みを早期に始めた利点が大きかったばかりでなく, 早期の読みの指導がその後の成績に悪影響を及ぼさないことがわかる。Durkin によると, 早期の読みの指導をよしとするとは結論できないが, すくなくとも, この研究結果は, 就学前における読み方指導開始に関する従来の考え方を再検討することの必要なことを示唆しているという。⁶⁰⁾⁶²⁾⁶³⁾⁶⁴⁾

さらに1960年代に入ると, 早期の読みに関する研究が続々と報告された。⁶⁰⁾⁶⁷⁾ その1つがDenver公立学校系統によって支持された縦断的研究であるが, この研究の中間報告によると, 1) 両親はわが子に読み方を始めるのを援助できること, 2) 公立学校では多くの児童に入門期の読み方を教えて成功をおさめることができる, 3) 早期の読み方指導がプラスの累積的效果をもっていること, が明らかにされているようだという。⁶⁹⁾

専門誌以外の雑誌などにもこの種の論文が掲載されるほどであった。⁶⁹⁾⁷⁰⁾⁷¹⁾

これらの雑誌を読んで両親たちは従来の幼稚園教育課程に不満をもち, その改革を主張した。⁷⁴⁾ 幼児教育学者も 幼児教育のありかたに対してつぎ

のように述べている。

「幼稚園教育において、新しい方向を求める時機がやってきた。過去数年間において、幼稚園教師や指導主事や両親とか関心のある市民をふくめて多くの人々によって、幼稚園教育のあり方に対して変化を求める必要があることが口に出されるようになってきた。国をあげて、幼児にとって適切な教育が現在与えられているかについて、多くの問題がとりあげられてきた。今日のように、ますます技術化され、かつ複雑をきわめている社会に対応するためには、あまりにもわずかな数の幼児だけしか適切に準備されていないという不安がある。全く大量の情報がますます加速度的に展開している理由からみても、教育の実際についての諸問題が同様に起こってきたのである。知識の性質について、幼児の養育において、またわれわれの社会がもつ技術面において見られる変化から、今日の幼児のもつ諸要求に対するプログラムを手直しするというさし迫った要求が強調されているのである」⁶⁹⁾

従来、児童中心主義は、子どもの発達を身体的・社会的・情緒的成長へのアプローチと解し、知的内容に対する子どもの側の要求を無視してきた観があったように思われる。

「健全な身体的・社会的および情緒的な発達に対しては、いつの時代にも同じように、今日においても十分に適切な注意が向けられなくてはならない。しかしながら、実はこのことだけではまだ完全であるとはいえない。というのは、現在知的発達の面に関しては、3歳から6歳までの年齢の時期こそ、これまで考えられてきたよりもはるかにたいせつなものであることが、最近になってきわめて明確な事実として認められてきたからである。もしこのような主張が正しいものであるとするならば、この年齢における幼児の知的発達に対しては、従来にもまして今日もっと大きな注意が払われなくてはならないというべきであろう」⁷⁰⁾

1964年に国際読書学会 (International Reading Association) はその学会誌

Reading Teacher (10月号)に「就学前・入門期の読み方」を特集して、就学前の読み方指導をよしとする論文を掲載した。⁶⁴⁶⁹⁷⁷

しかし一方では、早期の読み方指導に対する反対意見もあったのである。⁷⁸⁷⁹⁸⁰ N. B. Smith はレディネスがととのっていないのに幼児に読むことを強要するならば、結局それは無益であるばかりでなく、有害な影響を与えるものであると指摘し、幼児への早期の読み方指導に反対している。⁸⁰

結 び

これまでレディネス概念の歴史的展望を行なってきた、レディネス概念には 1) レディネスを成熟の結果とみる 元型的レディネス概念 (genotype concept) と 2) レディネスを学習の結果とみる 顕型的レディネス概念 (phenotype concept) とに 2 分されていることがわかった。前者のレディネス観を背景にした読みのレディネス研究は、読みのレディネス成立の時期を明らかにしたり、第 1 学年の読みのアチーブメントを予測する諸々の能力をさぐろうとしてきた。これに対して、後者の考え方に基づく読みのレディネス研究は、読みのレディネス成立・発達に關与する諸要因の効果を吟味して、効果の大きい要因を操作して、レディネスの成立・発達を早めようと試みてきた。最近の研究は第 1 学年の読みのアチーブメントに対して予測性の高い能力の発達に効果を及ぼす環境的要因をさぐることに重点をおいてきた。今後のレディネス研究はたんに外的環境的要因が読みのレディネスの成立・発達に効果を及ぼしているかどうかということばかりでなく、発達と教授・学習との相互作用を明らかにすることが求められなければならない。

(付 記)

- 1) (報告 6) は 1974 年 9 月 27 日千葉大学主催の日本教育心理学会で口頭発表されたが、いずれ報告書の形にまとめられる予定である。
- 2) 人間発達における遺伝的要因と環境的要因との相互作用についての考察はいずれ行なうであろう。

参考文献

- (1) Bigge, M. L. and Hunt, M. P. Psychological Foundations of Education. Tokyo : John Weatherhill, Inc., 1965.
- (2) Hilgard, E. R. and Bower, G. H. Theories of Learning. Tokyo : Overseas Publications, Ltd., 1967.
- (3) NSSE, Report of the National Committee on Reading, 24th Year Book of the National Society for the Study of Education. Bloomington : Public School Publishing Co., 1925.
- (4) Harrison, M. Lucille, Reading Readiness. Boston : Houghton Mifflin Co., 1936.
- (5) Huus, Helen, Developing Reading Readiness, The Instructor, 74, 59-60, March, 1965. In William K. Durr (Ed.), Reading Instruction. Houghton Mifflin Co., Boston : 1967, 28-31.
- (6) 安岡龍太 読書レディネスに関する研究 (報告1) 歴史的展望と今後の課題 慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 第7号 慶応義塾大学大学院社会学研究科, 1966, 67-78.
- (7) 安岡龍太 読書レディネスに関する研究 (報告5) 学習に対するレディネスに関係ある諸問題 紀要第7号 調布学園女子短期大学諸学研究会, 1974, 64-108.
- (8) ルソー著 今野一雄訳 エミール(上)(中)(下) 岩波書店 1972.
- (9) 堀内守 教育思想の成立 教育学全集(2) 講談社 1967.
- (10) ペスタロッチ著 鯨坂二夫訳 ゲルトルートは如何にしてその子らを教えるか ペスタロッチ全集 第3巻 玉川大学出版部 1972.
- (11) フレーベル著 荒井武訳 人間の教育(上)(下) 岩波書店 1973.
- (12) 梅根悟監修 世界教育史研究会編 幼児教育史1 世界教育史大系21 講談社 1974.
- (13) Blair, G. M. & Jones, R. S., Readiness, 1081-1086, Encyclopedia of Educational Research, C. W. Harris (Ed.), New York : Macmillan Co., 1960.
- (14) Dowing, John and Thackray D. V., Reading Readiness, London : University of London Press Ltd., 1972.
- (15) Huey, Edmund Burke, The Psychology and Pedagogy of Reading, London : M. I. T. Press, 1972.
- (16) ジョン・デュウイー著 杉浦宏訳 児童とカリキュラム 関書院新社
- (17) 橋本重治 教育評価法総説 金子書房 1968.
- (18) Durkin, D. Teaching them to read, Boston : Allyn & Bacon, Inc., 1970.

- (19) Gates, A. I. *The Improvement of Reading*, New York : Macmillan Co., 1962.
- (20) Arthur, Grace, *A Quantitative Study of the Results of Grouping First Grade Children According to Mental Age*, *Journal of Educational Research*, 12 (October, 1925), 174-185.
- (21) Morphett, M. V. and Washburne, C. *When should Children Begin to Read Elementary School Journal*, 31, 1931, 496-503.
- (22) Hall, G. S., *The Psychology of Adolescence*, New York : D. Appleton Co., 1936.
- (23) 藤永保編 児童心理学 有斐閣 1973.
- (24) Ilg, F. L. & Ames, L. B., *School Readiness Behavior Test used at the Gesell Institute*, New York : Harper & Row, 1964.
- (25) Hymes, J. L., Jr., *Before the Child Reads*, Evanston, Illinois : Row, Peterson & Co., 1958.
- (26) Hunt, J. McVicker, *The Psychological Basis for Using Preschool Enrichment As an Antidote for Cultural Deprivation*, *Merrill-Palmer Quarterly*, X (July, 1964), 209-248.
- (27) Gesell, A. & Thompson, H. *Learning and Growth in Identical Twin Infants*, *Genetic Psychology Monographs*, 1929, 6, 1-124.
- (28) McGraw, Myrtle M. *The Neuromuscular Maturation of the Human Infants*. In Dennis Wayne (Ed.), *Historical Readings in Developmental Psychology*, New York : Appleton-Century-Crofts, 1972.
- (29) ジョセフインR. ヒルガード 就学前児の学習と成熟 3—17, ウェイン・デニス編 黒田実郎訳編 幼児の行動・言語・知能 児童心理学選書2 岩崎書店 1965.
- (30) マートル マグロー 乳幼児期に特別の訓練を受けた子どもたちのその後の発達 41—89, ウェイン・デニス編 黒田実郎訳編 幼児の行動・言語・知能 児童心理学選書2 岩崎書店 1965.
- (31) Durkin, D. *Reading Readiness*, *The Reading Teacher*, 1970, 23, 528-534, 564.
- (32) Gates, A. I. et al. *Methods of Determining Reading Readiness*, New York : Bureau of Publication, Teachers College, Columbia University, 1939.
- (33) Gates, Arthur I. *The necessary mental age for beginning reading*, *Elementary School Journal*, XXXVII (March, 1937), 479-508.
- (34) C. E. シルバーマン著 山本正訳 教室の危機(上)(下) サイマル出版会 1970.

- (35) 山内太郎編著 世界の教育改革 教育学叢書2 第一法規 1968.
- (36) J. B. ワットソン著 安田一郎訳 行動主義心理学 河出書房新社 1971.
- (37) Endler, Norman S. et al. Contemporary Issues in Development Psychology, New York: Holt, Rinehart and Winston, Inc., 1968.
- (38) 北尾倫彦他 幼児の精神発達と学習 創元社 1974.
- (39) J. S. ブルーナー著 田浦武雄・水越敏行共訳 教授理論の建設 黎明書房 1967.
- (40) Millar, W. Stuart. Conditioning and Learning in Early Infancy. In Brain Foss (Ed.), New Perspectives in Child Development, Bungay: Richard Clay Ltd., 1974.
- (41) Travers, Robert M., Essentials of Learning, New York: Macmillan Co., 1972.
- (42) F. M. ヘッチンジャー編 蜂屋慶・高橋史郎・藤武訳 幼児の知育 黎明書房 1973.
- (43) Fowler, W., Cognitive Learning in Infancy and Early Childhood, Psychological Bulletin, 5-9, 116-152, 1962.
- (44) Fowler, W., The Effect of Early Stimulation in the Emergence of Cognitive Processes. In R. D. Hess and R. M. Bear (Ed.), Early Education, Chicago: Aldine Publishing Co., 1968.
- (45) Benton, W., This is the Challenge. New York: Associated College Presses, 1958.
- (46) J. S. ブルーナー著 鈴木祥蔵・佐藤三郎訳 教育の過程 岩波書店 1963.
- (47) 小口忠彦・早坂泰次郎編著 人間発達の心理学 明治図書 1973.
- (48) 南館忠智 レディネス 385—407, 波多野完治・依田新・重松鷹泰監修 学習心理学ハンドブック 金子書房 1968.
- (49) Hunt, J. McVicker, Intelligence and Experience, New York: Ronald Press Co., 1961.
- (50) Bloom, Benjamin S. Stability and Change in Human Characteristics, New York: John Wiley and Sons, 1964.
- (51) M. ペインズ著 平野一郎他共訳 幼児学習革命 黎明書房 1970.
- (52) Williams, F. (Ed.), Language and Poverty, Chicago: Markham Publishing Co., 1970.
- (53) Evans, Ellis D. Contemporary Influences in Early Childhood Education, New York: Holt, Rinehart and Winston, Inc., 1971.
- (54) 岡津守彦編著 教育革新の動向 第一法規 1969.
- (55) Educational Policies Commission, Universal Opportunity for Early

- Childhood Education, Washington, D. C. : National Education Association, 1966.
- 56) Standing, E. M. *The Montessori Revolution in Education*, New York : Schocken Books, 1966.
 - 57) Hunt, J. McVicker, *Revisiting Montessori*, 102–127, J. L. Frost (Ed.), *Early Childhood Education Rediscovered*, New York : Holt, Rinehart & Winston, Inc., 1968.
 - 58) Witty, Paul A., *Studies of Early Learning—Their Nature and Significance*. In Herman D. Behrens and Glenn Maynard (Ed.), *The Changing Child*, Illinois : Scott, Foresman and Company, 1972.
 - 59) Moore, Omar Khayyam & Anderson, Alan Ross, *The Responsive Environments Project*. In Robert D. Hess & R. M. Bear (Ed.), *Early Education*, Chicago : Aldine Publishing Co., 1968.
 - 60) Durkin, D., *Children who Read before Grade One*, *Reading Teacher*, 14, 1961, 163–166.
 - 61) Durkin, D., *Children who Read before Grade 1: A Second Study*, *Elementary School Journal*, 64, 1963, 143–148.
 - 62) Durkin, D., *Should the Very Young Be Taught to Read?* *NEA Journal*, 52, 1963, 20–24.
 - 63) Durkin, D., *A Fifth-Year Report on the Achievement of Early Readers*, *Elementary School Journal*, 65, 1964, 76–80.
 - 64) Durkin, D., *Early Readers—Reflections after Six Years of Research*, *Reading Teacher*, 18, 1964, 3–7.
 - 65) Durkin, D., *Children who Read Early*, New York : Teachers College Press, 1966.
 - 66) Appleton, Edith, *Kindergarteners Pace Themselves in Reading*, *Elementary School Journal*, 64, 1964, 248–252.
 - 67) Sutton, M. H., *Readiness for Reading at the Kindergarten Level*, *Reading Teacher*, 17, 1964, 234–240.
 - 68) Brzeinski, Joseph E., *Beginning Reading in Denver*, *Reading Teacher*, 18, 1964, 16–21. In William K. Durr (Ed.), *Reading Instruction*, 39–43, Boston : Houghton Mifflin Company, 1967.
 - 69) Morris, Joe Alex, *Can Our Children Learn Faster?* *Saturday Evening Post*, 243 (Sept. 23, 1961), 17–24.
 - 70) Strang, Ruth, *Should Parents Teach Reading?* *The PTA Magazine*, March 1963, 7–9.

- (71) Hillman, Rosemary, In Defense of the Five-Year-Old, Saturday Review, 46 (November 16, 1963), 77 ff.
- (72) Kelly, M. L., When are Children 'Ready' to Read? Saturday Review, 46 (July 20, 1963), 58 ff.
- (73) グレン・ドーマン著 林靖訳 ドーマン博士の幼児開発法 講談社 1971.
- (74) Beckett, Dorothy B., Philosophical Differences in Reading Concepts, Reading Teachers, 18, 1964, 27-32.
- (75) H. ロビンソン/B. スボデック共著 上野辰美・丸屋譲共訳 幼稚園の革新——幼児教育内容の現代化をめざして—— 明治図書 1972.
- (76) ケネスD. ワン著 上野辰美訳 幼児の知育 明治図書 1968.
- (77) Shaw, Jules Harold, Vision and Seeing Skills of Preschool Children, Reading Teacher, 18, 1964, 33-36.
- (78) Artley, Sterl A., Reading in Kindergarten, In Harvey F. Clarizio et al. (Ed.), Contemporary Issues in Educational Psychology, Boston: Allyn and Bacon, Inc., 1970.
- (79) Hymes, James L., Jr., Early Reading is Very Risky Business. In H. F. Clarizio et al. (Ed.), Contemporary Issues in Educational Psychology, Boston: Allyn and Bacon, Inc., 1970.
- (80) Smith, Nina Banton, Early Reading: Viewpoints, Childhood Education, 42, 1965, 229-232, 241.